

2025 年 7 月 20 日 説教「狐には穴があり」

ルカの福音書 9 章 57～62 節

今朝の聖書箇所の前段では、弟子達が互いに自分達の中で誰が偉いのかと議論しているところに、イエスは「一番小さい者が一番偉いのです」と言われました。そして、ルカの福音書は 9 章 51 節から、キリストがエルサレムに向かって歩み始めたということで、新しい段階へと入っていくというを確認しました。この福音書では、10 章にもわたってエルサレムに入っていくまでの、貴重な記事を掲載しているのです。

1. イエスについて行くこと (57～58 節)

— ①どこにでもついて行きます (57)「さて、彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。『私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます。』」

彼らが向かっていた最終的な目的地はエルサレムです。サマリヤからエルサレムへの途上です。そこで、ある人がその決心を伝えたのです。これは十二弟子の一人ではなく、同行する人々の一人です。その人の決心はこうでした。「私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついていきます」。かなり、はっきりとした弟子になりたいという決意ですね。イエス・キリストの周辺は、イエスのなさることや教えられるを通して、大きな力、励まし、慰めなどを得ていたのです。この方について行けば間違いがない。この方こそ救い主だという確信が広まっていたと思われます。

②枕する所も (58)「すると、イエスは彼に言われた。『狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所もありません。』」

ところが、イエスはその決心のことは言わずに言われるのでした。「狐には穴があります」と語られます。野にある狐は旧約のネヘミヤ 4 章 3 節にも登場します。狐は陰険でずる賢い動物のように扱われます。いずれにせよ、その狐には穴があるのです。また、空を飛ぶ鳥についてはマタイ 6 章で「空の鳥を見よ。種蒔きも刈り取りもしないのに、神は養ってくださる」(26 節)というところに出てきました。ここでは、狐も空の鳥も棲家があるが、人の子イエスには枕する所すらないと言われるのです。もちろん、イエスにはその時その時に休む場所は備えられたでしょう。しかし 安定的な住まいはなかったのです。

2. 葬りはまかせて (59～60 節)

①私の父を葬ることを (59)「イエスは別の人に、こう言われた。『わたしについて来なさい。』しかしその人は言った。『まず行って、私の父を葬ることを許してください。』」

さらに、イエスは別の人に言われました。エルサレムへの途上であることは変わりがないでしょう。今回は、イエスの側から「わたしについて来なさい」と言われたのです。以前、ペテロと兄弟のアンデレに「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」(マタイ 4:19)と

命ぜられたことがありました。その時に二人は、すぐに網を捨てて従ったのでした。ヤコブ、ヨハネ、マタイも同様でした。今ここで、同様の事を言われた人は、『まず行って、私の父を葬ることを許してください。』と答えました。緊急事態である父の死があったのか、あるいはその日が近いのかはわかりません。ともかく、従う前にまずは葬りをしたいのですと答えたのです。

- ②神の国を言い広めなさい (60)「**すると彼に言われた。『死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。』**」

すぐ従わない者に対して、イエスは葬りについては、それをなすべき人がいるのだから、それをその人達に任せなさいと言われるのです。ここにおいて、イエスは旧約の律法において、祭司は「どんな死体のところにも行ってはならない。自分の父のためにも、母のためにも、自分の身を汚してはならない」(レビ 21:11)とあるのを念頭におき、弟子には覚悟が必要であることを述べておられるのです。そして、彼らがなすべきことは、行って神の国を伝えることだと言われます。

3. 従うことを優先する (61～62 節)

- ①家の者にいとまごいを (61)「**別の人はこう言った。『主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。』**」

さらに別の者も言うのです。「主よ。私もあなたにお従いします。ただ、その前に、家の者たちにしかるべきことを説明するために、ひとたび帰らせてください。」

- ②手に鋤をつけてから (62)「**するとイエスは彼に言われた『だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。』**」

するとイエスは彼に言われたのです。「だれでも手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」農作業をする時に、鋤をもってその作業を始めて前に向かい始めた場合、もはや後ろを向くことなく前に向かって進みます。後ろを見ていては、作業は滞ってしまいます。イエスに従っていくと決めた者は、主を信じて前に進むべきだということです。弟子があるべき姿は、どんな場合でも主に従っていくことだということです。それは、旧約律法において、ナジル人は「父、母、兄弟、姉妹が死んだ場合でも、彼らのため身を汚してはならない。」(民数記 6:7)とありますが、キリストの近くにいる弟子達にはこの精神も参考にさせて、従うことの大切さを教えているのです。

《結論》9 章においては既に、イエス・キリストは従うことの大切が述べられていました。23 節に「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」とありました。弟子となることの厳しさがそこには示されていました。

ところが、今朝の聖書箇所においては、愛を説くイエスがどうしてそんなに非人情なことを言われるのかと思われた向きもあるでしょう。ここに登場する三人の者たちのうち、二人目は従うにあたっては「父を葬ることを許してください。」と言い、三人目は「家の者にいとまごいに帰らせて下さい」と言っています。十戒の第五戒には「あなたの父と母を敬え」(出エジプト 20:12)とあります。ならば、その葬りやいとまごいは当然のことではないかという風に思われるでしょう。まして、日本人は家族を大切にすることから、イエスの言うことはもっての他だという人もあるでしょう。しかし、家族を大切にすることは、どこの国でも同じです。イエスはここで、父母の葬りを否定しているわけではありません。また、家族に対する配慮を否定しているわけでもありません。ここでイエスが問題にしているのは、従うことに弁解をつけて結局は従わない心です。特にここでイエスと対話している者たちは、12 弟子ではありませんが、キリストの近くにあつて、伝道の最前線に出て行こうとしている者たちです。テモテ第二の 2 章 3～4 節にはこうあります。「キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをとともにしてください。兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はありません」とパウロはキリストの弟子を戦いに出る兵士にたとえています。キリストの弟子はキリストを見失わない事が大切なのです。従う心があれば、家族に挨拶して従うことは許されるでしょう。エリヤがエリシャに出会った時に、エリシャは牛を用いて土地を耕していました。エリヤは通る時に、自分の外套を彼に掛けました。すると、エリシャは「父と母とに口づけさせてください。それから従います」と願いました。エリヤが許すと、家族への配慮を果たした後にエリヤに従ったのです(第一列王 19:20～21)。言うまでもなく、エリシャはエリヤの後継者として大いに用いられました。ですから、問題はその人が本気に従おうとするかどうかなのです。

覚えておきたいことは、「わたしについて来なさい。」と言われ、弁解を退けられた主イエスは、ただ厳しいことをいう方ではありませんでした。ご自分も、狐すら穴があり、野の鳥にも巣があるのに、「枕する所もない」と言われるほどに困難な生活を受け入れて歩んでおられたのです。馬小屋のお生まれになったイエスは、実際的に野宿するようなこともあったのです。そうした生活をも受け入れられて、宣教を続けておられたのです。だからといって、イエスと一行の歩みに悲壮感はありませんでした。まさに、信仰と希望と愛に満ちた歩みでした。イエス・キリストについて行く道には、恵みが溢れていました。弟子達の様子からそれがわかります。この方から目を離さずに、歩いていくところに、恵みと平安の道があるのです。私たちも、このイエス・キリストを日々に見上げて、ついていこうではありませんか。